

【達陀】だつたん

達陀という聞き慣れない言葉はサンスクリット語の *tapta* の俗語 *tatta* の音を写した漢語です。

「焼く」という意味ですが、仏典には「火による苦行」という意味で使われています。

サンスクリット語とは古代インド-アリア語のことです。中国では梵語といわれ、仏典の原典はほとんどがサンスクリット語で書かれています。普通、我々日本人が目にする経典はその漢訳本なのです。

仏教はその歴史の中でインド・西域・中国・朝鮮各地の土着信仰を取り込んできましたが、達陀もその一例で元は古代ペルシアのゾロアスター教(拝火教)の行[ギョウ]と思われます。日本では東大寺の修二会[シュニエ]の行法として残されています。

東大寺二月堂の舞台に竹の松明[タイマツ]を掲げる、お水取りの名称で親しまれているあの行事です。

修二会は天平勝宝4年(752)、東大寺の僧実忠和尚によって始められました。実忠は東大寺開山良弁僧正の高弟です。

以下、『二月堂縁起』を要約してみましよう。

天平勝宝三年辛卯十月、実忠は笠置寺の龍穴に入り、常念観音院にたどり着きました。そこでは天の諸聖衆が集い十一面悔過[けか]の行をしていました。悔過とは罪や過ちを悔い改めることを意味します。

実忠はこの行を人の世でも行えないか尋ねました。聖衆は「この地の一日は、人間の世の四百年にあたる。人間は寿命に限りがあるので無理だ」と答えました。

しかし実忠は「人間界の時が天界の時に及ばないのなら、お勤めの速度を速め、行道の回数は走って数を満たしましょう」とあきらめませんでした。実忠の熱意におされ聖衆は十一面悔過の行法を伝えます。

実忠が持ち帰った行法は修二会として平勝宝四年(752)二月より今日まで一度も絶えることなく続けられています。今年は1255回目になるはずです。

この法会は、3月1日より2週間行われていますが、もとは陰暦二月一日から行われたので、二月に修する法会という意味で修二会と呼ばれるようになりました。二月堂の名の由来もここにありま

天平勝宝四年は大仏開眼供養会の年に当たります。修二会は大仏を作るために銅や水銀で汚染された土地を懺悔し浄化する意味を込めた儀式ではなかったかという説もあります。火と水の浄化能力に期待したのです。

当時の鍍金技術はアマルガムメッキといって金紛と水銀を水飴状に混ぜ、銅に塗り込み、熱して水銀を蒸発させるという技法です。もちろん大仏の鍍金も例外ではありません。蒸発した水銀の

怖さを想えばゾッとする技法ですね。

修二会は前行・本行でほぼ1ヶ月、準備期間まで加えれば3ヶ月間にもなる法要です。行法の様子は略しますので下記をご参照ください。

<<http://www.kcn.ne.jp/~narayama/omizutori/shunie.html>>

クライマックスは3月1日から14日までの本行、分けても12日目からでしょう。

「神名帳」「過去帳」の読み上げ、竹を燃やしての松明と深夜の若水汲み、そして達陀の行となります。松明は練行衆（れんぎょうしゅう）の道明かりとしての意味があるそうですが、集まった群衆は舞台の下で寒さも忘れ火の粉を被り見学しています。

<http://nara.cool.ne.jp/naraarukukai/index_210.htm>

若水汲みは若狭井[わかさい]の井戸から観音さまにお供えする「お香水」を汲み上げる儀式です。この儀式から「お水取り」の名称が興りました。

この後、達陀の行に入ります。堂内では駆け足での行や寸劇とも思える儀式が繰り広げられます。

「達陀」という銘は主に歴代東大寺官長、塔中住職の銘として、修二会の松明の竹で作られた茶杓に多く見られます。手元に届いた道具屋さんのカタログには同様の竹で「お水取り」「若水」のほか「花便り」など春を連想させる銘も見受けられます。

「お水取りが終われば、もう春」、奈良の人々の季節感です。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~